

「2019年度(第11回)NIDCAPトレーニングコース」開催のご報告

日本DC研究会では、我が国の早産児ケアにNIDCAP (Newborn Individualized Developmental Care and Assessment Program)を導入し、早産児のディベロップメンタルケアの思想と理論、技術を発展させ、新生児医療の改善と子どもたちの未来を築くことを目的とした教育活動を推進しています。この度、NIDCAPのマスタートレーナーであるgretchen Lawhon先生をお迎えし、青森県立中央病院において第11回となるNIDCAPトレーニングコースを開催致しました(期日:2019年12月11~13日)。NIDCAPの詳細にご興味のある方は、日本DC研究会のホームページ(<https://japan-dcra.jp/nidcap/nidcap.html>)をご参照ください。

今回のトレーニングコース開催にあたり、青森県立中央病院の皆様には大変あたたかくお迎えいただき、準備を整えていただいて滞りなくコースを進めることができましたことに、改めまして心より感謝申し上げます。サイトコンサルテーションでは病院長、看護部長、事務局長、周産期センター長、産科・新生児科・リハビリテーション科の皆さま等、多数の方にご出席をいただき、大変有意義に開催することができました。これから、東北地方でもNIDCAPが発展することが期待されています。今後とも、研修生に対するご支援をよろしくお願い申し上げます。

■ トレーニング受講者の感想 -----

● 昨年の12月にNIDCAPトレーニングを開始し、この一年間はトレーナーの指導を受けながら自己学習をしてきました。自己学習を進めるなかで、自分が理解しきれていなかった部分や間違っ認識していた部分、また、レポートでどのように表現すれば良いのかなどについての迷いや不安がありました。今回のトレーニングでは、観察レポートをもとにディスカッションをすることで、様々な視点から物事を考えることができ、今後の課題を明確にすることができました。また明日からは実践していくのみです。NIDCAPトレーニングを受けるにあたり、数多くの方の支援があることに心から感謝し、その方々の期待に添えるように、ますます気を引き締めてトレーニングに臨みます。赤ちゃんの行動観察を通して、赤ちゃんの代弁者になるという重大な役割を背負うことのプレッシャーも実感すると同時に、赤ちゃんのご家族がより良い未来に向かえるように、少しでも役に立てる存在になりたいと思います。NIDCAPとは赤ちゃんのご両親、そしてスタッフにとっても本当に必要で大切なことを改めて実感することができました。自分の信念をもとに、決して強要でなく、無理せず少しずつ「あたたかなこころ」を育むことができる環境作りを目標に継続していきます。(青森県立中央病院 齊藤 幸子)



● 昨年のトレーニング後、継続して赤ちゃんの観察を行ってきました。毎回一人で観察を行っていたため、自信がもてず、今回のトレーニングも不安な気持ちを抱えて臨みました。観察前にグレッチェン先生やトレーナーに「楽しく」と何度も仰っていただき、赤ちゃん向き合う観察の時間を楽しむということをおぼれている自分に気付きました。しかし、今回も赤ちゃんの行動を読み取ることに必死で、なかなか楽しむ余裕はもてませんでした。トレーナーに丁寧にご指導をいただけたお陰で、以前よりも赤ちゃんの行動を理解し、赤ちゃんの気持ちになって、寄り添ってケアを考えることができるようになったと思います。まだまだ未熟ですが、成長を実感できて嬉しいです。また、今回のトレーニングを迎えるにあたって、院長や看護部長はじめ、NICUの部長・師長、その他多くの関係者の方々にNIDCAPに対してのご理解やご協力を得ることができ、大変感謝しております。また、NICUスタッフも快く観察に理解・協力してくれたことに感謝致します。赤ちゃん、家族、スタッフの関係性を作り、施設全体で赤ちゃんを家族をあたたくサポートするNIDCAPの魅力を感じました。NIDCAPを学ぶ機会を与えていただいたことに深く感謝致します。来年の信頼性評価に向け、今回学んだことを活かして自己学習に励みたいと思います。これからも乗り越えるべき課題は多いと思いますが、一步ずつ、赤ちゃんの代弁者として赤ちゃんに優しいケアをできるよう努力していきたく思います。(青森県立中央病院 宮林 紫)



● 昨年の初めてのトレーニングでは、赤ちゃんの反応の多さと、エネルギー消耗の反応も色々あることにただ驚いていました。また、シナクティブ理論やサブシステムをよく理解していない状態で研修を受けていたため、赤ちゃんの行動を観察すること自体が難しかったです。今回のトレーニングを通して、この1年間で赤ちゃんの行動を観察する技術が身についていることを実感できました。また、これまでのトレーニングでは赤ちゃんの強みと弱みが理解できず、

ずっと悩んでいましたが、新人教育や自己学習を通して赤ちゃんの理解を深め、「赤ちゃんが初めから全部一人でできているわけではない、サポートを受け、成長・発達をしているからこそ色々な機能や能力が獲得されるのだ」と視点が変わったことで、行動を読み取ることや赤ちゃんの強みと弱みにつなげて考えられるようになったと思いました。レポート作成では、「赤ちゃん」を主語にすることができず、まるで看護記録のようになってしまいうまく書くことができていませんでしたが、トレーナーにレポートを何度も添削していただき、たくさんの質問や疑問にもすぐに対応していただけたので、書く能力も身につけてきました。今後の課題は、赤ちゃんの反応が多い時にもしっかりと観察ができること、レポートを読みやすくまとめる力をつけることだと思います。赤ちゃんの声を家族が一番に理解できるよう、今後のトレーニングに取り組んでいきたく思います。(東京女子医大八千代医療センター 小嶋 久子)